

サムソン・ヤン
1979年香港生まれ。サウンド、パフォーマンス、映像、インスタレーションなど、様々な分野を横断し活動するアーティスト。シドニー大学で音楽、哲学、ジェンダー研究を学んだ後、2007年に香港大学でMPhilを、2013年にプリンストン大学で作曲のPhDを取得。ヤンの作品においては、音とその文化的政治性が中心にあり、さらにアイデンティティ、移住、国境といった主題が探究されている。制作の過程では、厳格で歴史に依拠したりサーチに深く取り組んでいるが、ヤンの作品はしばしば遊び心とユーモアに溢れたものでもある。これまでに、グッゲンハイム美術館（ニューヨーク）、国立国際美術館（大阪）、アルス・エレクトロニカ（リンツ）、ドクメンタ14: documenta radioなどで作品を発表。最近のソロプロジェクトには、Talbot Rice Gallery（エディンバラ）、森美術館（東京）などがある。2017年、第57回ヴェネツィア・ビエンナーレでは香港代表としてソロプロジェクト『Songs for Disaster Relief』を展開した。BMW Art Journey Award、アルス・エレクトロニカ、デジタルミュージック&サウンドアート部門で準優勝、2020年には第1回 Uli Sigg Prizeを受賞。ヤンはCMHKの創設者であり、アーティストコレクティブTomato Greyのメンバーでもある。

展示設営:株式会社ゴードー
映像設営:斎藤悠麻、松見拓也
字幕翻訳:日本映像翻訳アカデミー
グラフィックデザイン:小池アイチ
インターン:石川湖雪、主藤しゅう、中野咲希
コーディネート:中谷圭佑(京都芸術センター)

協力:オオタファインアーツ、京都大学人文科学研究所、
東京都写真美術館／恵比寿映像祭
協賛:PORTER'S PAINTS
助成:香港芸術發展局
主催:KYOTO EXPERIMENT

KYOTO EXPERIMENT
2023
京都国際舞台芸術祭

サムソン・ヤン

The World Falls Apart Into Facts

🕒 9.30 (Sat)-10.22 (Sun)
10:00-20:00

*9.30 (Sat)は22:00までオープン
*9.30 (Sat)12:30よりアーティストによるギャラリートークあり

📍 京都芸術センター ギャラリー南 1

The World Falls Apart Into Facts

2019年／2020年改定
2チャンネル・ビデオ+2チャンネル・サウンド(6分17秒、25分34秒)、3DプリントPLA樹脂、再利用されたファウンド・オブジェ(アヘンパイプ、土産楽器、ジョン・バロー『中国旅行記』初版)

本作は、中国を代表する民謡「Molihua(茉莉花)」の系譜を辿る研究プロジェクトを経て制作されたものである。この民謡は中国の国家的に重要な曲であり、公式訪問やオリンピックなど、文化外交の文脈においてしばしば演奏されてきた。中国のみならず、有名なオペラ『トゥーランドット』の中などでも引用されている。この曲の背景には、大英帝国より初の大使として中国へ派遣されたマカートニー使節団が、清朝宮廷と出会ったことによりヨーロッパへと「輸入」され、伝播し、編曲され、修正された形で中国へと「逆輸入」されたという経緯がある。

本作では、そのような「Molihua(茉莉花)」の伝達の歴史を、日本における唐楽の旋律の歴史と比較対照している。唐楽は、唐代に中国から日本に輸入された雅楽であり、現存する数少ない唐の音楽のひとつである。本作において上映される2つの映像では、一方で、このような音楽の系譜が持つ複雑さについて一匹の馬が観客にレクチャーをしており、もう一方では、作家が自ら作曲した音楽が観光客向けの土産楽器などによって演奏される。

サムソン・ヤンは本作を通して、ある音楽が文化を横断したときに起こる相互作用を検証し、他者の耳で聴く、ということの意味を考える。そして、文化の純粋性や真正性といった概念へと疑問を投げかけている。

作曲・テキスト・美術・映像編集:
サムソン・ヤン

パフォーマンス:
ジュネーブ・フォン、サムソン・ヤン、香港中文大学合唱団(指揮:レオン・チュー、クリスティ・ウオン)

ナレーション:
クリスチャン・ウェイコップ博士

ビデオ撮影:
イップ・ユウトン・ザカリー、ラウ・チュン・シン、ファン・カイ・チェク、レオン・ティン・チュン・ジミー、リー・チュン・ワイ、レオン・ホー・シン

プロダクションマネジメント:
ジョーンズ・リー

プロダクション:
クリスティ・コー、ドナ・ロイ、ビビアン・レオン、チャン・チャク・クワン、レイ・ウオン、ジョーンズ・リー、"ジョナサン"、ヘンリー・フォン、エドワード・ラウ、"ロッキー"、"エレファント"、"ヒム"、シシー・タン

録音:
サムソン・ヤン、ティード・リー

3D印刷テクニカルサポート:
アンドリュー・クロウ(Meta Objects)

3Dモデル:
Modified from “Venus de Milo (Aphrodite of Milos)” & “Discobolus (The Discus Thrower)”, SMK National Gallery of Denmark @Turbosquid; “The Three Graces at the Hermitage Museum, Russia” & “Michelangelo's David in the Accademia di Belle Arti of Florence, Italy”, Peter Edwards (Cool3DModels) @Thingiverse (https://www.thingiverse.com/thing:2445605) & (https://www.thingiverse.com/thing:2445538), CC by 2.0; “Robin the thinker”, lampmaker @Thingiverse (https://www.thingiverse.com/thing:34343), CC by 2.0; "The Thinker at the Musée Rodin, France", Bruce Stevens @Thingiverse (https://www.thingiverse.com/thing:2201627), CC by 2.0; "Marsyas", The Metropolitan Museum of Art @Thingiverse (https://www.thingiverse.com/thing:24042), CC by-sa 3.0.

スペシャルサンクス:
アレックス・レディング、テッサ・ギブリン、タルボット・ライス・ギャラリー、セイント・セシリアズ・ホール、エディンバラ大学リード音楽院



サムソン・ヤン インタビュー

様々な国を渡り数奇な運命を辿った中国の民謡「Molihua(茉莉花)」に着想を得た本展示は、発表する場所の地域性を盛り込みながら創作を展開していく。初夏に作品のリサーチとして京都を訪れたサムソンに、共同ディレクターの川崎陽子がインタビューとなり、作品に込めたメッセージや創作への意気込みを聞いた。

作品創作のきっかけについて

川崎:

今回の作品は、「Molihua」という中国の民謡がモチーフになっています。この曲が、John Barrowによって大英帝国を通してヨーロッパへ「輸入」され、その地での伝播を経て中国に「再輸入」されたことに、着目されていると聞きました。私たちは今年のKYOTO EXPERIMENTのプログラムを通して、言語の変遷やそれにより作られる文化的アイデンティティのあり方、流動性に焦点を当てたいと考えています。ヤンさんの作品は、文化の純粋性や正しさについて疑問を投げかけられているという点で興味深く、私たちの問題意識との接点を感じて展示していただくことになりました。まず、「Molihua」という歌がもつ歴史的・文化的経緯について注目されることになったきっかけを教えてください。

ヤン:

「Molihua」は中国で民謡としてよく知られていて、学校でも教えられていますが、背景や詳細を教えられることは少なく、ただ歌そのものを教えられてきました。ある日、音楽学者である私の友人が、音楽における文化交流についての展示の共同キュレーターを務める中で、「Molihua」を譜面に起こしたJohn Barrowの書物を扱っており、それが興味を持ったきっかけです。彼と関わる中で、「Molihua」が、大英帝国の統治時代であった1804年に楽譜が出版されていたことや、Karl Kambraという人によるチェンバロ（harpsichord）伴奏のバージョンの楽譜が存在する我知道了。

川崎:

当時の中国にチェンバロの楽譜はなかったであろう、という点も含めて面白いということでしょうか。

ヤン:

そうですね。ハーモニーというのが全く異質な概念でした。メロディーに対して楽器が同一の旋律を重ねたり飾りをつけるのは歴史的に紐づけができることなのですが、楽器がハーモニーを提供している、ということは、新しく外から来たアイデアだったわけです。なぜ、わざわざ

チェンバロを追加したのか、ということに思いを巡らせました。

また、自分が知っている「Molihua」のメロディーは、John Barrowの1804年のバージョンとほぼ一致しているんです。John Barrowは最初に、大英帝国のマカートニー使節団の一員として中国を訪れており、その際に「Molihua」を耳で聞いてその場で楽譜に書き留めたのだろうと考えています。どれだけ正確に記譜できたのかは分かりませんが、その楽譜が今知っているバージョンに近いということです。「Molihua」はその後、日本語バージョンと、中国の音楽民俗学者が書き起こしたバージョンが作られており、この二つは互いによく似ていますが、John Barrowバージョンとは異なっています。よって、今中国で親しまれているバージョンが、1804年の楽譜と類似しているということは、大英帝国にルーツがあると考えることもでき、非常に興味深いです。

作品に現れる「馬」のモチーフ

川崎:

作品は、2つの映像とオブジェクトの展示で構成されています。映像の1つでは、馬が音楽の系譜について、「Molihua」、「ケニー・Gと香港ポップ」、「日本の唐楽」の3つの例を出してレクチャーしています。別の映像では、「Horse Togaku」というタイトルの、ヤンさんが作曲された音楽を、果物の衣装を着た楽団が土産物の楽器を交えた編成で演奏しています。レクチャー映像だけでなく音楽の演奏の方でも馬が登場しており、「馬」というのがひとつ重要な表象なのかと思います。なぜ「馬」なのかをお聞かせいただけますか。

ヤン:

広東語で、「牛の頭に馬の口」という意味の言い回しがあり、物事の不一致や話していても理解しあえないことを表現する言葉なんです。ただし、マイナスの文脈だけでなく、どうしても解決できない状況に対するユーモアの意味も含んでいます。その言葉が念頭にありました。映像の中には馬がいて、牛のマスクをかぶった人も登場し、これらの要素を用いることで、より複雑性を持った

情報を表現したいと思いました。レクチャー映像内で、音楽の系譜というシリアスな内容を馬が厳格なイギリス英語の口調で喋る、という点においてもその意図が反映されており、馬がそういった役割に適していると考えています。

川崎:

扱っていることには複雑な文脈がある一方で、ビジュアルとしてはユーモアがあるという点が、ある種のフィクション性のようなものを与えていて面白いですね。映像内で演奏される曲についてもお聞きしたいのですが、この曲は、John Barrowのバージョンの「Molihua」をベースにしながら、それを解体していったという形なのでしょうか。

ヤン:

John Barrowのバージョンには歌詞があり、映像内の演奏では、歌詞はJohn Barrowバージョン、メロディーはJohn BarrowバージョンとチェンバロのKarl Kambraバージョンを元にしています。チェンバロを加え、唐楽のサウンドを参照した電子的クラスターコードを入れて、さらに、どんどん速度を落としてメロディーが分からなくなるようにアレンジしています。

川崎:

レクチャー映像の中に出てくるものを、演奏の映像の中で混ぜ合わせている、という感じででしょうか。

ヤン:

どちらかというレクチャーにおける様々な要素を、演奏の中で参照しているという形です。レクチャーは情報提供という位置づけで、歴史を追っていきます。対して、パフォーマンスは、より折衷的でユーモアを携えています。「Molihua」は式典や国家主義的な場で演奏されることが多く、そういった背景を踏まえて、馬を登場させて曲をいじってみよう、という気持ちがありました。

これまでの活動について

川崎:

ヤンさんはこれまで、サウンドや音楽を扱いながら、領域横断的なインスタレーション作品やパフォーマンスを発表されています。その中には、今回の作品のように、私たちがよく目にしたり聞いているものの裏には別のものがあるかもしれない、というような、知覚する主体の反転や、ある種の社会的・文化的な刷り込みが覆される、というようなことが見受けられるのではないかと思います。さらに、そういったテーマを時にユーモアを交え

て表現されるところがヤンさんの作品の面白いところだと思うのですが、そうした点についていかがですか。

ヤン:

確かにそういう側面もありますし、それだけでなく私の作品には折衷的な要素があると思っています。今回の作品で言いますと、自分が慣れ親しんだ歌のJohn Barrow版やKarl Kambra版に触れることによっても起こる「他者の耳を通して自分の文化を聞く」ということ。他人の身体になることはもちろん不可能ですが、思考実験としては興味深いと思います。そして、人々が違った視点で物事を見ることができるということを思い出す、という意味でも、面白いことだと思います。

京都でのリサーチで出会った土産用楽器

川崎:

「The World Falls Apart Into Facts」は、日本でも既に2回発表されています。今回の展示に際して実施した京都でのリサーチはいかがでしたか。

ヤン:

短いリサーチでしたが、京都市内で販売されている土産用の楽器を見て回りました。それらの楽器は実際に演奏することもできますが、観光客向けの商品としても消費されています。美術の文脈で言うと、広東地域は絵画のジャンルで貿易絵画という油絵のジャンルがあり、描かれているのは広東地域の風景なのですが、西洋の技法で描かれており、輸出用の絵画となっています。そういった貿易絵画との接点を土産用楽器にも感じています。今回見かけた楽器の中には、貝殻で作られてて、ポストカードを兼ねた使い方のカードが入っているものがあり、楽器であり、土産物でもあるという、二重の機能を持っていることが窺えました。私はこの作品を発表する際に、いつも現地の楽器をできるだけ取り入れるようにしていますので、今回のリサーチで得たことも反映していけたらと思っています。